

---

# 精霊姫の逃亡劇

夢月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

精霊姫の逃亡劇

### 【Nコード】

N1012R

### 【作者名】

夢月

### 【あらすじ】

少女は絶望していた、この世の全てに。それでも、少女は表向き、どこにでもいるごく普通の女子高校生として日々を過ごしていた。そう、ごく普通の女子高校生だったのだ。――彼らに出会う、あの時まで。――。

小説タイトルを変更しました。（2011/4/26現在）

## プロローグ（前書き）

初投稿です。あまり深く考えずに思いつくままに書いているので、話の内容を後から書き直す可能性もあります。

## ブローグ

やっと、やっと全て終わりにできると思ったのに．．．

実際は、終わるどころか始まってすらいなかったなんて。

そのことにもっと、もっと早く気づいていたら、

こんなにも苦しくて、悲しくて、真っ黒な感情に囚われて、  
行き場のない思いを抱え込んで潰れそうになるなんてこと．．．  
きつとなかった。

いや．．．違う、違う。

結局、どんな選択肢を選んでも、何をしても、何も変わらない。

いつだって私の今までの人生は、光の见えない闇に閉ざされたもの  
だったのだから。

私に許されているのは、たった一つだけ．．．

ただ只管に、苦しんで、苦しんで、苦しみ抜くことだけ。

私には絶望しかない．．．いや、なかった。

彼らに出会うまでは．．．

## ブログ（後書き）

不定期更新です。

それでもよかったら、ぜひ次回も見てください。

目が覚めるとその先は（前書き）

短めです。

## 目が覚めるとその先は

「・・・・・・・・・・どこ？・・・・・・・・・・」

ふわふわと雲の上にいるような浮遊感の後、突然の落下するような感じが全身を襲い、ハッと目を覚ますとそこは薄暗い空間だった。

そこは森、というよりは樹海といったほうがしっくりするような、木々が鬱蒼と生い茂る緑豊かな場所だった。そして、その樹海にはぽっかりとあいた空間があり、まさに樹齢何千年の御神木という雰囲気漂わせた巨木がある。

少女はその巨木の根によってできた空間の中でまるで守られるようにして横たわっていたのだ。

「何なの？・・・・・・・・・・ここは、いつたい・・・・」

「と、とりあえずここから出たほうがいい・・・・よね？」

そして、少女は薄らとした光の差す隙間から外を覗いてみて初めて

気づいた。

「・・・・・・・・・・・・・う・・・・・・・・そ・・・・・・・・」

自分のいる場所が、浮ういていることに・・・・・・・・

目が覚めるとその先は（後書き）

暫く主人公の名前は出ないかもです。

## 状況把握

「浮い・・・て・・・る?・・・ここ、浮いてるの?」

ど、どうしよう・・・この高さって飛び降りても大丈夫・・・なのかな?

ここからだといまいち正確な高さが分からない・・・でも、このままずっとここにいても仕方ないし・・・はあ・・・

少女は思い切って飛び降りてみることにした。

「えいつ」

すると、不思議なことが起こった。

「え?・・・何、これ?」

柔らかい風が包んだかのように、ふわっと少女の体が浮き、やがてゆっくりと地面に降り立った。

何?今の・・・まあ、とりあえず無事に降りられたみたいだし、とにかく今はここが何処なのかとか、一体どうしてこんなことになっているのかとかを考えなくてはいけない。

そこで、少女は初めて周囲を見渡してみた。

・・・樹ばかり。それに、樹が遮っているせいであんまりここまで光が届いていないみたい。僅かな隙間から見える空は透きとおっ

たきれいな青空だから、夜ではないんだろうけど。．．．まあ、不思議とそんなに暗くは感じないんだよね。それにしても．．．何て大きな樹なんだろう。何だか神秘的な感じがするし、まるで御神木みたい。私、さっきまであの樹の根のところにいたんだよね．．．何であんなところに．．．．．？．．．何？あれ．．．。

少女は改めてその大きな樹をまじまじと見てみて、ふとあるものに気づいた。

何だろう？あれ。黄色っぱくて、綿みたいなのがふわふわと。

少女がいた巨木の下、ぽっかりと大きく窪んでいる空間に、それはふわふわと漂っていた。

淡く黄色っぱい光をほんのりと纏ったそれは、綿のようなものだった。

少女が気になってそれに近づいて触ろうとすると、その綿のようなものがいくつも近寄ってきた。

## 状況把握（後書き）

情景描写が難しいです。  
変だと思つところがあつたら教えてください。

懐かれた？！

はあゝ．．．何でこんなことに．．．どうしよう．．．．．。

\*\*\*\*\*

それら綿らしきものは、少女の前まで近づいて来るとぴたっと止まり、宙に浮いたまま動かなくなった。そして、少女とそれらの宙に浮いたものは、数秒間互いに見つめ合って（？）いた。

「．．．．．」

その後すぐにそれらの綿（？）は動き出し、少女の周りをくるくると回り始めた。

少女は何が起こっているのか、また、どうしたら良いのか分からずに暫し呆然とし、固まってしまった。

\*\*\*\*\*

本当に、一体どうしたら．．．あれから、離れようと動いたら何故か逆にくっつかれて、何とか離れようと何度か頑張ってみたけど、一向に離れてくれないし．．．はあー、でもまあいいか。特に害はないみたいだし。

「．．．君達って、生き物．．．なの？」

何も反応なし、か。やっぱり生き物、というわけではないのかな？

それにしても、ここって何処なんだろう？

樹は浮いてるし、何だかよく分からない綿（？）もある．．．いる

（？）し．．．うーん．．．

もしかして、というより、もしかしくてもここって異世界．．．  
なのかな？

日本どころか地球ですらないってこと？

そもそもなんで私、こんなところにいるんだろう？

とにかく、何でこうなったのか思い出さないと。えーっと、最後に  
覚えてるのは．．．確か．．．

そうだ、あの時急に耐え難いほどの眠気に襲われて．．．．．

## 回想

少女、社<sup>やしろ</sup> 璃湖<sup>りい</sup>はごく普通の高校二年生だった。

特に変わったこともなく、平凡な日常だったが、穏やかで平和な日々を送っていた。

そして、その日もいつもと変わらない日常を過ごしていた。．．．  
ただ一点を除いて。

\*\*\*\*\*

その日、璃湖は朝から異様な眠気に襲われ、授業中も集中できず、ずっと頭がぼーっとしていた。

「どうしたんだろう？ 普段はこんなことないのに」

特に思い当たることもない。昨日も夜更かしをしたということもないし、いつもと同じような時間に眠りについた。睡眠は十分に足りていたはず。特に変わったこともなかったし、疲れるようなことをした覚えもないのに．．．。本当に、一体どうしてこんなに眠くなっちゃうの？

とにかく、今日は部活を休むことにして、残りあと二つの授業は何とか頑張ろう。

\*\*\*\*\*

はあ。やっと終わった。何とか乗り切った。あとは帰るだけだ。

「璃湖、大丈夫？」

「沙夜ちゃん。・・・うん、何とか」

「どうかした？今日ずっと眠そうじゃない。現在進行形で」

「うん。まあね」

「珍しい。昨日、夜更かしでもした？」

「違うよ。何だかよく分かんないけど、朝からずっと眠くて」

「・・・本当に大丈夫？」

「大丈夫だよ。ただ眠いだけだし。でも、今日はもう帰ろうかと思つて。悪いけど、沙夜ちゃん、部長さんに言つといてくれる？」

「分かった。ちゃんと言つとく」

「ありがとう。じゃあ、もう帰るね」

「気をつけて帰りなさいよ」

「分かってるって。それじゃ、また明日」

「また明日」

沙夜ちゃんは小学校からずっと友達で、今日のように何かとよく私のことを心配する。

今回もまた心配させてしまった。気をつけないと・・・。

今日はいつもより早めに寝よう。

\*\*\*\*\*

よかった。今日は電車空いてるみたい。これなら座れそう。

暫くすると、璃湖は耐え難いほどの眠気に襲われた。

もう駄目、眠い・・・駅に着くまでまだ時間あるし、少しだけ寝よう。

そして、次に璃湖が目を覚ました時は、すでにあの巨木の根の中だった。

## 回想（後書き）

やっと主人公の名前出てきました。

## 諦め

．．．．．結局、何も分からなかった。

どう思い出してみても、最後の記憶は電車の中で眠ってしまったところで終わっている。

目が覚めたらもう既にここにいた。．．．これじゃあ、何も分からない。

ここは何処なのか、どうしてこんなことになっているのか。全然分からない。

そもそも、あのときに眠ったりなんかしなければよかったんだ。何としてでも眠気に耐えるべきだった。

そう思う一方で、璃湖は心の何処かでは分かっていた。

どう足掻いたところで、結局は避けられることではなかったということ。

これは、起こるべくして起こったことなのだと、何となくそう感じていた。

「異世界トリップしちゃったっていうこと．．．なんだよね」

ぽつりとそう零した時、今まで近くを漂っているだけだったあの綿（？）達が、まるで慰めるかのように、璃湖の頬に擦り寄ってきた。

「慰めてくれてるの？．．．ありがとう」

やっぱり生き物なのかな？何だか暖かいし。

璃湖は綿（？）達に慰められて、少しだけ冷静になれた。

．．．異世界かぁ。まさか現実にこんなこと、それも自分自身に起こるなんて．．．．．

でも、いい機会なのかもしれない。本当はもうずっと、何もかもが嫌だったのだから。

嫌で嫌で堪らなくて、最近は何をしても苦痛にしか感じなかった。

生きることに嫌気が差していた。

でも、どうすることもできなかった。どうしたらいいかも分からなかった。

ただただ苦痛でしかない日々を何とかやり過ごすだけで精一杯だった。

もう、いいよね．．．．．

璃湖はこんなことになって混乱してはいたけれど、不思議と帰りたいとは思っていなかった。

家族や沙夜のことは気掛かりではあるが、それでも帰りたいとは思わなかった。

もういい。深く考えるのはやめよう。これでやっと、何もかも終わりにできるんだから．．．

璃湖は近くの樹に背を預け、そこに座り込むと目を閉じた。

まるで、世界の全てを拒絶するかのように．．．．．

そんな璃湖を心配するように、あの綿のようなものたちはいつまでも、ふわふわと漂っていた。

## 諦め（後書き）

今のところ何とか頻繁に更新できてます。

**幕間 報告、そして異変（前書き）**

視点変わってます。

## 幕間 報告、そして異変

時は少し遡る。それは、巨木の根の中、璃湖がまだ深い眠りについていた頃のこと。

\*\*\*\*\*

その場所は、璃湖のいるところからそう遠くない場所にあった。そして、その場所のとある一室には、二つの人影があった。二人の間には、若干緊迫した空気が漂っていた。

「陛下、既に機は熟し、あの方も無事こちらにお戻りになられました」

「そうか。では・・・今は聖母ミリア・オーグの樹海だな？」

「はい、然様にございます」

「それで、あの子の様子は？」

「今はまだ、深く眠っておられます。リヴリード殿の話では、おそらく体が急激な変化についていけないのではないかと、とのこと。今暫くは、お目覚めにならぬかと」

「そうか、ならば暫しの間、様子を見ることとしよう。何か異変があれば、随時報告するように」

「承知致しております」

その時、その場の緊迫した空気を打ち破るように、一人の男が騒がしい足音を響かせ、いきなり現れた。

それを見て、報告していた方の男が眉を顰めた。

「・・・シーフ殿、ノックもせずそのように騒々しく「あーはいはい、悪いけど説教なら後にして」  
「・・・」

シーフと呼ばれた男は、冷たい視線を受けながらも平然と話し始めた。

「陛下、急ぎ伝えたいことがある」

そう切り出したシーフの気安い口調に、向けられる視線がさらに冷たさを増した。

しかし、それにもシーフは気にせず話を続ける。

「つい今し方、ロダから連絡珠<sup>ルマシユール</sup>が届いてね」

シーフはそこで一旦言葉を切ると、今までの軽い雰囲気我真剣なものへと変えた。

「心種<sup>エナコットン</sup>の様子がおかしい、と」

陛下と呼ばれていた男は、正反対の雰囲気醸し出していた二人を今まで面白そうに見ていたが、その言葉を聞き、その表情を引き締めた。

「心種・・・それで、おかしいとは一体どのような様子なんだ？」

「ロダからの連絡珠によると、どうやら心種が成長しているようだ。感情表現が下級精霊<sup>エービロウデ</sup>のレベルにまで達しているみたいだとの報告だった」

それを聞いたほかの二人は、一瞬何を言われているのか分からなか

った。

「心種が成長・・・だと？それ単体で、ということか？」

「そのようだな」

「そんなことは聞いたことがない」

「実は、ロダの報告にはまだ続きがある。曰く、もしかしたらあの方が目覚められたのではないか。そのために心種が何らかの影響を受け、このような異変を引き起こしたのではないか、とのことだ」

「！！！！」

「さて、どうする？陛下」

**幕間 報告、そして異変（後書き）**

今回造語をいくつか出しました。

## 逃避（前書き）

視点戻ります。

## 逃避

．．．．．？

深い深い眠りの底、璃湖は暗闇に支配されたその場所で、何か声のようなものを聞いた気がした。

「．．．だ．．．う．．．か．．．っ．．．．．！！！」

やっぱり、聞こえる。．．．何？これは．．．声？誰か．．．が、叫んでいる？

その声は、だんだんはつきりと聞こえるようになってきていた。

「おいっ、しつかりしろ！！」

そして、ついにしつかりとその声が聞き取れるようになった。

するとその途端に、今まで真っ暗闇に覆われていたその場所が、徐々に明るくなり始めた。

すぐに璃湖は自分の意識が浮上し始めていることに気づき、焦った。

いや．．．だ．．．ヤダ、ヤダヤダヤダヤダヤっ．．．もう嫌だ、嫌なのに．．．．．

目覚めたくない。ずっと、このまま深い眠りの中にいたい。だからもう放っておいてよ！！

璃湖のその嘆きに反応するように、一旦は明るくなり始めていたその場所が、再び闇に閉ざされようとしていた。さらには、璃湖自身までが闇に飲み込まれ始めていた。

\*\*\*\*\*

キィ、パタンッ

そのドアの閉じる音に、璃湖は薄らと目を開けた。

暫くの間、璃湖はぼんやりと何処を見ともなしに見ていた。

やがて、だんだんと意識がはつきりしてくると、自分が何処かの部屋のベッドに寝ているのだと分かり、ガバッと起き上がった。

「うつ・・・頭が・・・クラクラする」

何？・・・これ。

璃湖は何とかそれを治めようと息を深く吸い込み、ゆっくりと吐き出した。

すると、少しだけそれは和らいだ気がした。

それから璃湖は辺りを見渡してみた。

それにしても・・・

「ここは一体・・・どこ・・・なの？」

璃湖が今いるその場所は、とても簡素な部屋だった。

机と椅子に筆筒、それから璃湖が寝ているベッドがあるだけ。

無駄なものを一切省いた、必要最低限のものしか置かれていない部屋だった。

窓からは月明かりが差し込み、ほんのりとした光で部屋を僅かに照らしていた。

そのことから、今は夜なのだろうということが分かった。

．．．えつと．．．確か、私は．．．そうだ、あの森にいて、それで．．．

なのに、何でこんなところに？

自分でここまで来た記憶がない以上、誰かに連れて来られたんだと思うけど．．．

あつ、そういえばさつき、ドアが閉まる音がしたような。

ということは、誰かがいるってこと．．．

それって、もしかしてここに私を連れてきた人なのだろうか？

それに、またすぐにその人がこの部屋に来るかもしれないよね。

どうしよう．．．もう誰とも関わりたくないのに。

．．．逃げよう。

もしかしたらその人は、私が倒れていたように見えて、助けるつもりでここに連れて来たのかもしれない。でも、それでも私は、その人には悪いけれど、どうしても関わりたくない。

だから、逃げるの。

その人が、再びこの部屋に来る前に。一刻も早く。

どうやらこの部屋は一階にあるみたいだから、窓から外に出るのはそんなに難しくはないと思う。

逃げるなら今のうちだ。

そう思い、璃湖は急いでベッドから下りて窓を開けた．．．いや、開けようとした。

しかし、開けられなかった。

鍵が掛かっているようには見えないのに、何故が開けられなかった。

何で？．．．

その時不意に、

「何かお困りのようですね」

と、後ろの方から声をかけられた。

突然現れた彼らは・・・1（前書き）

長くなったので途中で分けました。

突然現れた彼らは・・・1

私は今、三人の人達に連れられて、“ミア・オーグ聖母の樹海”と呼ばれる所を  
かれこれ彼此一時間くらいは歩き続けている。実際はそんなに長い距離を歩  
いているわけじゃないと思うけど、樹が密集しているし、道も悪く  
歩き辛いのだ。  
ちな因みに、何処に向かっているのかは分からない。何度か何処に行く  
のか訊いてみたけど、  
『とても綺麗な場所ですよ』と言って、はっきりしたことは何も教  
えてもらえない。

・・・この人達（そういえば、人じゃないんだっけ）について来た  
のは間違いだったかもしれない。

そもそも何故こんなことになっているのかと言うと、

それは、数時間ほど前のこと……………

\*\*\*\*\*

「何かお困りのようですね」

その声に後ろを振り返ってみれば、そこには一人の背の高い男の人  
が立っていた。

「・・・だ・れ・・・？」

「ああ、これは失礼致しました。どうやら驚かせてしまったようで

すね」

そう言つてその男の人は、私を安心させようとするかのように、穏やかな笑みを浮かべた。

「そんなに警戒なさらなくても大丈夫ですよ。私達は決して貴女に危害を加えたりはしませんから」

「・・・私・・たち？」

「ええ、そうです。実は、私の他にあと二人ここにいるんですよ」  
「えっ？」

璃湖はそう言われて辺りを見渡してみたが、他に人がいるようには見えなかった。そもそもこの部屋には隠れるような場所などない。

「いきなり三人で現れたら貴女を驚かせてしまうと思って、二人には暫く隠れているようにと言ったのですが、結局は驚かせてしまいましたし、あまり意味がありませんでしたね」

そう言つて彼は申し訳なさそうに苦笑した。

「さて、そう言つわけなので二人とも、もう出てきてもいいですよ」

彼がそう言つた途端、何処からともなく二人の人物が現れた。

一人は大柄な男で、木の葉を伴つて。

そして、もう一人は中性的な容姿の女性で、霧とともに。

「!？」

璃湖は驚きのあまり、一瞬声も出なかった。

「な・・・に？一体、どうなって・・・」

「すみません。また驚かせてしまいましたね。実は私達は精霊なんです」

「せいれい・・・」

「ええ。こちらの男性の方は、名をロダと言い、樹木の精霊です」

すると、大柄な男性、ロダさんがお辞儀をするように僅かに頭を下げたので、慌てて私も頭を下げた。

「それから、そちらの女性は「待つてください、ジル」

その時、綺麗な凜とした声が彼の言葉を遮った。

突然現れた彼らは・・・2

彼の言葉を遮ったのは、先ほど霧とともに現れてからずっと黙って控えていた女性だった。

「どうかしましたか？」

「自己紹介くらい自分でさせて下さい」

ジルと呼ばれた最初に声をかけてきたその人は、一瞬驚いたような表情をした後、苦笑した。

「そうですね。ではどうぞ」

そう言っただけは少し後ろの方に下がり、彼と入れ替わるようにしてその女性が一步前に出てきた。

「私は水の精霊で、ミーレ・ディウネイアと言います。ミーレとお呼び下さい、姫さま」

・・・ひめ・・・さま・・・もしかして、私のこと？・・・て、えっ！？

璃湖は最後の“ひめさま”という言葉に疑問を持ったが、その後のミーレの行動に、その疑問は頭から飛んでしまった。

ミーレはまるで、騎士が主に忠誠を誓うかのように片膝を付き頭を下げたのだ。

璃湖はミーレのその行動にどうしていいか分からずに、思わず固まってしまった。

「ミレー、姫様が戸惑っておられますよ。頭を上げなさい」

そう言われて頭を上げたミレーは、漸く璃湖の様子に気づいた。

「あ、申し訳ありません、姫さま。・・・大丈夫ですか？」

ミレーはそう言って立ち上がった。

「・・・は、はい・・・だい・・・じょぶ・・・です」

「では最後に私ですね。私は地の精霊で、ジルフィス・ノルテアと申します。以後よろしく願います」

そう言つてジルフィスは優雅な動作で頭を下げた。

そしてそれにつられて璃湖もお辞儀を返し、自己紹介をした。

「私は社璃湖と言います。・・・えつと、璃湖が名で社が姓です」

「それではリコ様、それぞれ自己紹介が済んだようなので、一先ずここを出しましょう」

「えっ・・・でも、あの・・・」

「ここから出たかったのですよね？違いましたか？」

「いえ、そうですけど、あの・・・」

「いろいろと言いたいことや訊きたいことがありだとは思いますが、時間がないので取り敢えずここを出しましょう。質問などは後でゆっくりお聞きますし、ちゃんと説明も致しますから」

「・・・分かりました。でも、その前に少しだけいいですか？」

「ええ、何ですか？」

「あの、様付けはやめてください。それと、できれば敬語も」

「すみませんが、どちらも出来兼ねます」

「えっ、どうしてですか？」

「それは後ほどする説明で分かると思いますよ。では、行きましよう」

「・・・」

こうして、璃湖は聖母の樹海ミリア・オーグの中、三人に連れられて歩くこととなり、現在に至る。

\*\*\*\*\*

璃湖達一行は、あれから更に10分ほど歩き続けた。そして漸く辿り着いたそこは、璃湖が最初にいたあの巨木のある場所だった。

「ここ・・・は・・・」

驚く璃湖に、ジルフィスが説明してくれた。

「ええ、そうです。ここはリコ様、貴女があ部屋に連れて行かれる前にいた場所です」

「！！・・・どうして・・・そんなこと、知ってるんですか？」

「そのことも後ほど説明致します。さあ、行きましよう」

「え？あの、ここが目的の場所じゃないんですか？」

「ええ、私たちが目指すのはこの下です」

「下・・・ですか？」

「はい。あの巨木の下に綿のようなものが漂っているでしょう？“エナコッテン心種”と言うのですが、それはこの下にある・・・リコ様！！？どうかなさいましたか！？」

そこで、  
ジルフイスは璃湖の様子がおかしいことに気づいた。

## 束の間の休息（前書き）

サブタイトルと内容が合っていないかもです。

## 束の間の休息

何．．．これ．．．おかしい．．．．．

急に．．．どうなって、るの？

だめ、だ．．．どンドン、全身から．．．力が．．．抜けていく．．．  
．．．

\*\*\*\*\*

「リコ様っ！！」

ジルフィスは真っ青な顔で崩れるようにしてしゃがみ込んでいく璃湖を見て、一気に顔から血の気が引くのを感じた。

遂に限界が来てしまった。

悠長に話をしている場合ではなかった。

もっと迅速に行動するべきだった、と。

そうジルフィスは己の見通しの甘さを悔やみながらも、すぐさまミールとロダの二人に指示を出す。

「ミールは先に行って準備を。ロダは急いでリコ様を下へ」  
「分かりました」

ミールはそう返事を返すと、すぐに巨木の下へと行き、そこにある穴の中へと姿を消した。

ロダは無言でジルフィスに頷き返し、璃湖を抱え上げる。そして巨

木の方へ走り出そうとした時、璃湖が今にも消えてしまいそうな声で制止の声を上げた。

「まって・・・待って、ください・・・私・・・は大丈夫、です・・・から・・・」

「大丈夫ではありません。リコ様、先程ロダが貴女を抱え上げた時、一瞬でしたが意識がありませんでしたよね？」

「・・・」

「貴女の身体はもう限界なんです。一刻の猶予もありません。・・・さあ、ロダ行きましょう」

ジルフィスは璃湖からの反論がないのを見て取ると、ロダを促し巨木の方へと急いで向かった。

そして、璃湖を抱えたロダとジルフィスは、先程ミレーが消えていった穴の中へと同じように姿を消した。

\*\*\*\*\*

彼らの降り立ったその場所は、神秘的で不思議な光景が広がる所だった。

果てのない草原が延々と続くその場所には、淡い光で白く輝くほっそりとした木々が所々に立っていた。

そして、辺りには無数の心種エナコットンがふわふわと漂っていた。

「リコ様の御様子はどう？」

「幸い、何とかぎりぎり之間に合ったようで、今は落ち着いた様子で眠っておられます。あの御様子なら、直に目も覚まされると思います」

ジルフィスはミーレのその言葉を聞き、心底ほっとした。

「・・・そうですか。これで一先ずは安心ですね。・・・さて、と  
それでは取り敢えず、リコ様が目覚めるまでの間、私達はやらなければならぬことを済ませてしましましょうか」

そう言つてジルフィスは二人に指示を出した。

「ミーレは引き続きリコ様の容体管理を。それから、ロダは陛下に現状の報告をお願いします。私は少し、心種の様子を見て来ますので」

「分かりました」

「承知した」

ミーレとロダはそれぞれ返事を返し、各自やるべきことへと行動に移った。

そしてジルフィスは、一瞬璃湖のいる方向に心配するような視線を向けてから、自分のやるべきことに取り掛かった。

\*\*\*\*\*

それから約15分後。

・・・何だろう・・・ふわふわして、あったかくて、それから・・・何だかほっとする・・・この感じは・・・

「・・・ん・・・こじ、は・・・」

漸く璃湖は目を覚まし、ぼんやりと辺りを見回した。

「お目覚めになられましたか、姫さま？」

「・・・ミー・・・レ、さん？」

ミーレに声を掛けられ、璃湖は数回瞬きをすると、だんだんと意識がはつきりし出し、ゆっくりと自分の今の状況が見えてきた。

「!・・・何、これ？」

璃湖は、湖面を思わせる色合いの薄い膜のようなもので、膝を抱えるようにして浮いていた。

そして驚くことに、璃湖のいるそれ自体も大きな泉の上を、一メートルくらいの高さで浮いていた。

驚いた璃湖が思わずそれに触ると、触れた所から波紋が広がっていた。

「落ち着いてください、姫さま。すみませんが、もう暫くその中にいてください」

「あの、これは一体・・・」

「それもちゃんと説明しますから・・・」

「お目覚めになられたんですね」

その時、二人の会話に割って入るように、ロダを伴ったジルフィスが声を掛けてきた。

「それでは、早速ですが説明に入ってもよろしいでしょうか、リコ様？」

## 精霊は美形？（前書き）

やっと説明に入るはずが、ほとんど三人の容姿と服装のことだけで終わってしまいました。

## 精霊は美形？

「さて、まず何から話しましょうか？」

「・・・・・・・・」

璃湖はジルフィスのその問いに、直ぐには答えられなかった。

何しろ訊きたいことがありすぎて、何から訊いたらいいのか分からないのだ。

璃湖が今分かっていることは、ごく僅かな事柄だけだ。

ここが異世界だろうということ。

それからジルフィス、ミール、ロダの三人が精霊であるということ。たったそれだけのことしか分かっていない。

・・・精霊・・・だからなのかな？三人ともすごい美形・・・

そう、ジルフィス、ミール、ロダの三人は皆、それぞれタイプは違うが一樣に整った顔立ちをしていた。

まずはジルフィス？？？彼の切れ長の双眸は落ち着いた色合いのとびいろ鳶色で、琥珀色に透き通った長い髪は緩く三つ編みにされて身体の前に垂らしていた。細身で背は高く、優に180cmは超えているだろうと思われた。そして服装は、神父のような装いをしていた。

?????ジルフィスさんて服装は神父さんみたいだけど、何だか英国紳士って感じ。物腰も丁寧だし・・・

次にミレ????彼女は長い睫に縁取られた瑠璃色の瞳に、全体的に短めな髪は澄んだ泉を思わせる浅葱色で、襟足だけ少し長く伸ばしていた。すらりとした体型に背は女性にしては高めで、170cmを少し超えるくらいだろう。騎士服のような藍色の詰襟に、凜とした佇まいは正に騎士と言った感じだ。

?????ミレさんは中性的な美人さんで、自己紹介のときに騎士っぽい礼の仕方をしていたけど、服装も雰囲気も本当に騎士みたい。

最後にロダ????彼は鋭い琥珀色の双眸に、茶色がかった深緑の髪は短く刈り込まれており、精悍な顔付きをしていた。がっしりとした体格に加え、背は2メートルはありそうな長身で威圧感がある。少し古びた感じのする驚色の大きなフード付のマントを、紐で緩く縛って留め、頭からすっぽりと身に纏っていた。

???????最初にロダさんを見た時は何だか威圧感があって少し怖かったけど、抱き上げられた時に見えた瞳は心配そうにこっちを見ていて、全然怖くなかった。

そんな風に考えながら三人を見ていた璃湖は、漸く最初に訊くことを決めた。

「・・・まず最初に、この状況を説明してください」

自分を包んでいる膜のようなものに軽く触れながら、璃湖はそう言った。

すると、この世界や様々なことについて詳しい説明をすることになつてから今までずっと、ロダと共に黙って後ろに控えていたミーレが一步前に出てきた。

「それについては、私が説明します」

## 精霊は美形？（後書き）

あんまり美形ってことについて表現できませんでした。

“ポワフィエル”と“クランルーフ”

「それはポワフィエルと言ってます」

「・・・ぽわ・・・ふいえ・・・る？」

「はい」

ミーレが掌を上に向けながらすつと前に右手を出すと、その掌から徐々に水が湧き出て来た。

その水はだんだんとシャボン玉のような形を成していった。

それは色は違うが、璃湖を包んでいるものの掌サイズと言った感じで、ミーレの掌の上から数センチ浮いていた。

「今姫さまを包んでいるそれは“ポワフィエル水膜”と言って、浄化や治癒などを施すためのものです」

ミーレは先程の言葉に詳しい説明を付け加えてそう言い直した。

「私の掌の上に浮かぶこれは、ただの水の膜で出来た球体でしかありませんが、姫さまを包んでいる水膜は違います。よくご覧になって下さい。色が違いますよね？」

そう言われて璃湖は、自分を包んでいるものとミーレの掌の上で浮いているものをよく見比べてみた。

「・・・そう言われてみれば・・・違いますね」

私を包んでいるポワフィエル????で良いんだよね????は透きとおった水色に琥珀色が混じったような色んだけど、ミーレさんの掌の上で浮いてるのは透明で色がない。

「その水膜は体力回復の作用を加えてあるので、そのような色なんです。それから因みに言うと、姫さまが目覚められたばかりの頃とも少し色が違います」

「・・・あつ！・・・そう言えば、そうですね」

あの時に見た水膜の色は確か・・・そうだ・・・私の真下の方にあるあの大きな泉のように、薄青く澄んだ水の色だった。

「最初の水膜は、浄化のためにその泉の力を借りて生成したもので、今の水膜は先程も少し説明しましたが、この石を使うことによって体力回復の作用が加わったものなんです」

ミーレは掌の上に浮かぶ水膜を蒸発させるようにして消すと、代わりに地面に置いてあつた靫から琥珀色の小さな丸い石を取り出した。

「それは・・・？」

クラムルフ

「これは靈力を結晶化させて石にした“クラムルフ靈石”と呼ばれるものです。今はその水膜に使った後なのでこのように小さいですが、普通は掌くらいの大きさで作ります」

「あの、今までに聞いた事とこの今の私の状況から考えると、私は浄化や体力回復が必要になる程何か良くない状態だった、と言うことなんですか？」

「ええ、大変危険な状態でした。今もまだ完全には体力が戻っていないようなので、もう少しその中に居てもらわなければならないのですが・・・」

「それは良いんですけど、あの、靈石・・・でしたっけ？」

「ええ、そうですか・・・」

ミーレは璃湖が何を言おうとしているのか分からず、困惑したよう

に眉を顰めたが、次の璃湖の言葉に直ぐに表情を緩めた。

「大分元の大きさより小さくなっちゃったみたいですが、それって私のために結構使ってしまったてことですよね？・・・大丈夫なんですか？」

「ああ、そのことなら気にしなくて大丈夫ですよ。もともと姫さまのためにジルが用意したものですから」

「えっ・・・シルフィスさんが？」

「はい。体力を回復させるためには地属性の力が必要で、それでジルが地属性の霊石を用意したんです」

「そうだったんですか。でも、どうして私はそんな状態になってしまったんですか？」

「それは・・・」

「あの世界の環境に、貴女の身体と心が耐えられなかったからです」  
璃湖の問いに対して言い淀むミレーの代わりに答えたのは、今まで黙って二人のやり取りを聞いていたシルフィスだった。

「・・・もう、限界だったんですよ・・・」

“ポワフィエル”と“クランルーフ”（後書き）

ミレの瞳の色を瑠璃色に、そして髪の色を浅葱色にそれぞれ変更しました。

## ルフエンリーア

「どういう、こと・・・ですか？あの世界って・・・もしかして・・・」

訳が分からないといった風に困惑したように訊く璃湖の言葉を聞き、ジルフィスは少し悲しげな顔して言った。

「・・・順を追ってお話します。まず最初に確認致しますが、ここが貴女の居た世界とは異なる世界だということはもうお分かりですね？」

コクリ、と戸惑いながらも僅かに頷いた璃湖を見てから、ジルフィスは再び話し始める。

「最高神ルフエンリーが守護するこの世界、ルフエンリーアは5つの大陸といくつかの小さな島々から成り立っています」

「こちらをご覧下さい」

そう言つて、ミーレは先程克蘭ルーフ靈石を取り出した鞆から小さなスノードームのようなものを取り出した。そしてミーレがそれに手を翳すと、立体的な地図らしきものが浮かび上がった。

「それは？」

「これは“ホロスール立体地図”と言う世界地図なんですが、逐一最新の情報を更新する最も詳しく正確な地図で、数も少なくとても貴重なものなんです」

「・・・？」

どういふことが分からないと言うように首を傾げる璃湖に、更に詳

しい説明をミールは付け加える。

「例えば、今この瞬間に地形が変わった場合、この地図も同じように直ぐ様地形を変える、と言うことです」

「それは、すごい地図ですね」

それから再びジルフィスが話し始める。

「私達が今居るこの場所は、その地図の真ん中に位置する、四方をそれぞれ4つの大陸に囲まれた“ウイオ・シフレ聖なる大陸”と呼ばれる大陸です」

その聖なる大陸を囲む4つの大陸は、

|         |                                 |
|---------|---------------------------------|
| 東に位置する、 | “ <small>ファリ・シフレ</small> 緑の大陸”  |
| 西に位置する、 | “ <small>ボワ・シフレ</small> 水の大陸”   |
| 南に位置する、 | “ <small>フルーレ・シフレ</small> 華の大陸” |
| 北に位置する、 | “ <small>デューロ・シフレ</small> 闇の大陸” |

と言うふうにそれぞれ呼ばれているのだと、ジルフィスは説明した。

それらの説明が終わると、ジルフィスが説明を続ける中、ミールは立体地図を鞆に仕舞った。

「そして、この世界には精霊族、ヒト族、魔族の3つの種族が存在しています」

「魔族・・・？」

「はい。ヒト族にとってもそうですが、我々精霊族にとっては尚の事脅威となる存在です。それでも今現在は、この3つの種族は上手

く共存することが出来ています」

「今現在は・・・？」

「・・・少し前まで3種族それぞれの間には、緊迫した空気が漂い、共存なんて出来る雰囲気ではありませんでした。あの頃からすれば、今の状況はまるで夢物語と言った感じだったのです」

「それがどうして今は・・・？」

「・・・決して少なくはない犠牲と170年と言う時間を掛けた結果、今の共存と言う形に落ち着くことができたのです」

「・・・」

璃湖は“少なくはない犠牲”と“170年”と言う長い時間に、激しい戦いがあっただろうことを想像して、小さく眉を顰めた。

「・・・少し、昔話をしましょうか」

「・・・？」

「まだ、3つの種族がいがみ合っていた頃の話です」

「・・・それは、この世界にとって最も絶望に満ちていた時代・・・」

## 戦乱の火種（前書き）

東日本大震災により、被災された皆様に心からお見舞い申し上げます。

それから暫く暗い内容が続くので、不快に思われる方もいると思いますが、

それでも良かったらどうぞ見てやって下さい。

## 戦乱の火種

「元々この3つの種族は、今のように共存できるほどの穏やかな関係を築いていたんです」

そう言つてジルフィスは、少し寂しげに微笑んだ。

「寧ろ今よりも関係は良好なくらいで、それぞれの種族の足りない部分を補うようにして助け合つて生きていたんです」

\*\*\*\*\*

その昔、最高神ル・フェンリーが守護するルフェンリーアは、世界樹と大きな湖のある1つの大陸を3つの大きな大陸が囲むように位置する、4つの大陸から成る世界だった。

そして、囲むように位置していた三大大陸にはそれぞれ精霊族、ヒト族、魔族の3つの種族が存在していた。

最初、一切関わりがなかったそれらの三種族は、ある日を境に急激に交流を持つようになっていった。

三種族が交流するようになる切っ掛けとなったその日に、一体何があつたのか。

そのことについては、最高神ル・フェンリーが、三種族それぞれの代表となる3名の者達にある神託を授けたのだと言う話が実しやかに言い伝えられている。

その神託とは、曰く、

『各々が抱えている問題を解決したくば、3つの種族で協力し合うべし』

こうして、それぞれの種族はその神託に従い、3つの種族間で友好的な関係を築いていった。

最初は、自分たちの種族とは根本的に異なる他の種族に、それぞれ戸惑いを見せていた。

しかし、神託の通りに三種族が協力し合えば、それぞれの種族が抱える問題を解決できるだろうことにやがては気付き、どの種族も協力し合うことに対して異を唱えることはなかった。

それからその切っ掛けとなった日については、後に“ルノ・バステイ降臨の日”とされ、その日は今日まで伝わる伝統的な“バステイル降臨祭”と呼ばれる行事が行われている。

その降臨祭では、ルーフェンリーを祭るために精霊族とヒト族によって、奉納歌や奉納舞が捧げられる。

魔族はその行事に参加しないが、それでもその日一日は厳粛に過ごすように決められている。

後に迎える戦乱の時代にあっても、その行事が途絶えることはなかった。

それぞれ協力し合いながら共存することで、文明は目覚しく発展し

ていった。

それから暫くの数百年間は、希望に満ちた穏やかな時代が続いた。

しかし無常にも、その穏やかな時代は終わりを告げた。

事の発端は、事も有ろうに最高神ルーフェンリーのある行いにあった。

ある時、ルーフェンリーは一人の少女に興味を引かれた。

その少女はとても見目麗しく、そして何よりも清らかな心の持ち主だった。

ルーフェンリーはその少女の生き方を見ていて、巫女としての素質があると思った。

そして、ルーフェンリーは巫女になるために必要な加護をその少女に与えた。

まさかその行動が、三種族の中を陰悪なものにし、更には永きに亘る戦乱の世を引き起こす火種となるとも知らずに……………

その少女の種族、ヒト族は当然喜び、益々ルーフェンリーへの崇拜心を高めた。

そして、性格と容姿から元々誰からも好かれていたその少女は、以前にも増して大切に扱われた。

しかし一方で、他の二種族はこのことを快く思っていなかった。

精霊族は、一つの種族のみに加護を与える形になってしまったこと

の危険性を危惧して。

魔族は、より強い力を求める種族柄、ヒト族への嫉妬心ゆえに。

そんな思いを燻らせたまま、暫く時は流れ・・・

その流れる時と共に、三種族の中は悪化の一途を辿った。

そして、遂に限界が訪れた・・・

戦乱の世の幕開け。

誰もがそれを止めることが出来ず、成す術もなくその瞬間を迎えるしかなかった。

戦火の口火を切ったのはどの種族だったのか、それは定かではない。

だが、ヒト族の少女に加護を与えたことが全ての始まりであることは明白だった。

## 希望の光

「・・・神様でも・・・この世界の最高神であるルーフェンリーでも、戦争を止めることはできなかったんですか？」

今まで黙って話を聞いていた璃湖は、“誰にも止めることが出来なかった”と言うのを聞いて、思わずその質問が口を衝いて出ていた。

「・・・神だからこそ、ですよ。私達三種族と神の間には複雑な制約がかけられているんです。そのために、神は私たちの問題に直接は関わることができず、巫女を必要とするんです」

「それは・・・どういことですか？」

「巫女を介して関わることで、神託による助言がし易くなるのです」

「・・・ですが巫女がいない場合、神託を授かることができるのは、年に一度訪れる降臨ルノバステイの日にくつかの条件を満たした時だけなのです？？」とジルフィスは続けた。

「ルーフェンリーは神様だから直接何かすることは出来ないけど、助言だけなら出来る、と言うことですか？」

「はい」

「だったら・・・」

「戦争を止めることは出来たんじゃないですか？」そう言おうとした璃湖は、ジルフィスの表情に思わず言葉を途切れさせた。

ジルフィスは、何かに堪える様な悲しげな表情をしていた。

その表情のまま、ジルフィスは「それでも、駄目だったのです」と囁く様な声でそう答えた。

「当然ルーフェンリーは、戦争開始を思い止まるよう神託を下しました。ですが、ほとんどの者が神託を聞き入れる余裕などなく、もう争いを回避できるような状態ではありませんでした」

「そんな・・・それじゃあ、その後は・・・戦争が始まってからはどうなったんですか？」

「それからもう、ただ只管に戦争と休戦を繰り返すばかりでした」  
「でも、ヒト族に特別な力はなかったんですよ。それなのに他の二種族とともに戦い続けることが出来たんですか？」

「戦争が本格化する頃には三種族の争いではなくなっていましたから。ヒト族が二つに分かれ、魔族と精霊族にそれぞれ付く形となり、二つの勢力で争っていたのです」

「・・・そんな状態から・・・どうやって・・・」

戦争を終わらせたのかと、璃湖は小さく呟いた。  
その呟きを聞いたジルフィスは、そんなある時、と静かに切り出した。

「精霊族のある若者の行動がひとすじの希望を齎し、それを切っ掛けに、徐々に状況が良い方向へと変わり始めたんです」

\*\*\*\*\*

戦乱の世の幕開けから早くも五百年余りの時が経ち、一向に終わりを見せない争いに、誰もが絶望し始めていた。

事の発端となったヒト族の少女は、巫女の力のためか老いることなく、普通のヒト族の倍は長く生きたが、その寿命も尽き、既に亡くなっていた。

しかし新たに巫女が選ばれると言うことはなく、そのためか、ヒト族の中にはこの争いに対して次第に疑問を持ち始める者が多くいた。そして、精霊族もまた元々争いを好まないその性質から、一刻も早くこの争いが終わることを願っていた。

しかし、そんな二種族の思いとは裏腹に、魔族だけは争うことを止めようとはしなかった。

それにより戦わざるを得ず、無意味な争いを続けるしかなかった。

そんな状況の中、精霊族のある一人の若者が、何とかこの戦乱を終わらせようと立ち上がった。

彼はまず、信の置ける仲間を出来る限り多く集め、それからある計画を立てた。

年に一度訪れる<sup>ルノ・バステイ</sup>降臨の日。

その日、その計画は実行された。

魔族率いる戦争を是とする過激派の者達に気づかれぬよう、ひっそりと秘密裏に。

神降ろし、その末に・・・

結論から言えば、彼らが立てた計画は成功した。????五十年の歳月をかけて。

では、なぜそれ程の歳月を費やしてしまったのか。

それは、彼等の立てた計画を実行するために必要な条件に起因する。

もうどんな小さな犠牲も払いたくない彼等が立てた計画、それは？  
????ルン・バステイ降臨の日の夜に神降ろしをするというものだった。

一歩間違えば、ヒト族から巫女が選ばれた時の二の舞になるかもしれないその計画は、過激派の者達に知られないように細心の注意を払って行われた。

そうして喚び出した最高神ルーフェンリーに、鎮静作用のある雨を降らせるように掛け合うことを目的として。????過激派の者達の気を静めるための故に。

この世界においての雨は、恵みを齎すものとされ、同時にもう一つ他の意味合いも兼ねていた。

鎮静の雨????それは昂る気を静めるとされ、そんな風に呼ばれていた。

彼等はその雨の持つ鎮静の力に一縷の望みを託すことにした。  
神の中でも最高位にあるルーフェンリーに願い出ることによって。

本来であれば、厳しい制約のために神は直接的に関わる事は出来ない。

だが、自然現象である雨を介してなら力を借りることが出来るのではないかと。

彼等はそう考えた。

もちろん、精霊族????水属性の精霊にも鎮静の雨を降らせることは可能だ。

しかし、最高潮に達した過激派の闘争心を完全に治めるには些か力不足だった。

それ故に、彼等は今回の計画????正に神頼みとしか言えないこの計画を立て、実行するに至った。

当初はこんな事でどうにか出来るはずがないと反対する者もいたが、他に何か言い策がある訳ではなかった彼等も、何もしないよりはマシだろうと思い直し、次第に協力するようになった。

それから最も重要なのが、先に述べた神降ろしをするために必要ないくつかの条件である。

神降ろしは降臨の日のみにしか行えない。

そして、それは雲ひとつない月と星々の輝く夜であること。

これを行う場は、魔の力の及ばない神気に満ちた清浄な土地であること。

人を殺めたことのある者には、これを行う資格はない。

また、悪心を抱く者も同様のこととする。

さらに、これを行う日は動物性のものを一切口にしてはならない。

そして最後に、事前に楔をし、身を清めておくこと。

これらの条件を全て揃えた上で、漸く神降ろしが成立する。

彼等はそれらの条件をなかなか全て揃えることが出来なかったために、五十年もの歳月を費やすことになってしまったのだ。

今回の計画の要である神降ろしは年に一回しか行えない。加えて天候にも左右される。

戦乱の世であった当時では、様々な事がままならない。

ほとんどの土地が戦場となり、戦争以前の面影もなく地形が変わってしまふほどに荒れ果て、神降ろしに適した場所を探すのにも一苦労する。

そして、このような時代であれば当然のことながら多くの者が人を殺めた経験がある。

そんな厳しい状況の中、それでも彼等は決して諦めたりはしなかった。

??????その結果、漸く全ての条件が揃いし時が来た。

【そなた達の言い分は良く分かった】

そう重々しく口を開いたのは、神降ろしにより地上に喚び出されたルーフェンリーだ。

「では???」

ルーフェンリーの言葉に表情を明るくさせた男は、次に続いた言葉に表情を一変させた。

【????だが神力を貸すことは出来ない】

この場には今、最高神であるルーフェンリー、最初に事態打開のために動き出した精霊族の若者、同じく精霊族の6つある属性からそれぞれの代表者が一名ずつ、そしてヒト族からはその長と神官長の計十名の者達が集まっていた。

そしてその場では、皆が黙って見守る中ルーフェンリーと精霊族の若者との会話がなされていた。

「・・・何故ですか？」

若者は思わず強い口調で問い質しそうになるのを、ゆっくりと息を吐き出すことで何とか抑えた。

【我が力を貸せば、あの時と同じ事を繰り返すだけだ。更に事態は悪化する一方であろう】

「その様な事はっ??？」

【無いと言えるか?】

「・・・」

冷静に切り返すルーフェンリーに、若者は直ぐに答えることが出来なかった。

ルーフェンリーの言っている事は間違っていない。寧ろその通りだと若者は思った。

だがそれでも??????

【我は後悔しておるのだ。安易に力を与えてしまったことに・・・】  
「・・・確かに、貴方の仰る様にただ事態を悪くさせるだけなのか  
もしれません」

若者は一旦そこで言葉を切り、射抜く様な眼差しで真っ直ぐにルーフェンリーを見据えた。

「ですが、だからと言ってここで何もかもを諦める様なことはしたくありません。以前の様な平和な世を取り戻すためなら、たとえ僅かな可能性だろうともそれに懸けてみるべきだと思います」

【・・・】

「それに、私の仲間にはこれ以上の争いを望む者は誰一人いません」

【・・・そなた達がそうであっても、全ての者がそうある訳ではな  
かろう?】

「ですから、それらの者達には気付かれぬよう細心の注意を払って  
事を進めてきたのです。そしてこれからは、より一層警戒を怠らぬ  
よう努め、内密に事を進める所存です。????どうか私達にお力添  
え願います。」

そう言つて若者が片膝を付いて最上級の礼を取ると、今まで静かに事の成り行きを見守っていた者達も一斉に同様の礼を取った。

【・・・・・・・・】

ルーフェンリーは厳しい表情のままにじつと黙り込み、辺りには緊迫した空気が張り詰めた。

そして暫しの沈黙の後??????

【・・・・あい分かった】

ルーフェンリーは根負けした、と言う様にゆっくりと息を吐き出すと、朗々と響く声でそう答えた。  
その声に皆が頭を上げると、「但し」と声が続いた。

【もうこれ以上どんな小さな犠牲であっても決して出さぬこと。それが条件だ】

「御意！」

こうしてルーフェンリーの協力の下、彼等は極内に本格的な事態打開へと動き出した。

神降ろし、その末に・・・（後書き）

なかなか過去の話が終わりません。

## 戦争終結と新たな問題

それから一年が経った。

ルーフェンリーの協力を得ることが出来た為か、事態は急速なまでの変化を見せていた。

それはもう、今までの苦労は何だったのかと言うくらいに。しかしそれでも、完全に問題が解決した訳ではなかった。

ルーフェンリーは水属性の精霊の力不足を補う形で協力し、鎮静の雨を定期的に降らせた。

最初の三ヶ月は全くと言っていいほどに何の変化も見られなかったが、彼等がやはり駄目だったのかと徐々に諦めの色を見せ始めた頃、漸く小さな変化が訪れた。

戦争が始まって以来、魔族が支配する土地では分厚い雨雲が垂れ籠め、陰鬱な空気が辺りに満ちていた。

そして時が経つにつれその範囲は広がり、遂には世界の三分の二を占めるまでになっていた。

しかし、その範囲が僅かに小さくなっていた。

鎮静の雨の効果が現れ始め、漸く彼等の苦労が実を結んだ瞬間だった。

それから、その小さな変化が起爆剤となったかの様に、数日後には瞬く間に良い方向へと急激な変化を遂げていった。

そして約一ヵ月後、過激派の者達が完全に戦意を喪失した事により、

長きに亘る戦争は終結した。

鎮静の雨が降る様になってから僅か四ヶ月余りしか経っていなかった。

長く続いた戦乱の時代を思えば、実に短期間での幕引きであつたと言えよう。

しかし戦争が終わりを迎えても全てが解決した訳ではなく、況して戦争の最中<sup>さなか</sup>に残された爪跡が無かつた事になる訳でもなかった。そして何よりも問題だつたのは、三種族の間に深い深い溝が出来てしまつた事だ。

それにより、彼等は頭を悩ませながらも途方に暮れかけていた。????もう、三種族それぞれが協力し合い共存するのは無理なのか、と。

だが、彼等が神降ろしをした日からちょうど一年後????つまりは降臨<sup>ル・バステイ</sup>の日、そんな彼等に救いの手が差し伸べられた。

最高神ルーフエンリーによって。

ルーフエンリーは彼等にある提案をした。

曰く????我等神が、これから生まれるある一人の子供に安寧と安らぎの力を託すのはどうか。然<sup>さ</sup>為<sup>す</sup>れば、これから先大きな争いが起こる事も無く、三種族が以前の様な関係を築き共存出来るだろう、と。

しかし彼等はそれに対して異を唱えた。

そんな事をしては、巫女が選ばれた一件の二の舞になると。

彼等はその事を何よりも恐れていた。

それでもルーフェンリーの考えは揺らがなかった。

【そなた達は我が出した条件を守り、見事戦争を終結へと導いた。そんなそなた達を我は信じている。同じ過ちはもう二度と犯さない  
と】

そのルーフェンリーの言葉を聴き、彼等は覚悟を決めた。

そして彼等は、ルーフェンリーの残した言葉???その子供が生まれるまでは決して過激派だった者達にこの事を知られてはいけない???通り、この事を知る全ての者に緘口令を敷く事で必死にその秘密を守り通した。

そのはずだった?????

あと少しという段階に気が緩んだ為か、何処からか情報が洩れてしまったのだろう。

あと一週間くらいでその子供が生まれるだろうという時になって、魔族がその子供を我がものにしようと襲ってきたのだ。

何とかその場は逃げ出す事が出来たが、かなり危機的な状態だった。

その為に急遽その子供との繋がりを媒介として、ルーフェンリーは地上に降り立った。

そして事態が落ち着きを見せるまではと、まだ生まれてもいないその子供を異世界へと避難させた。

それからはその子供を呼び戻すために、精霊族のあの若者を筆頭に事態解決へと尽力した。

???後に、精霊族の彼の若者は精霊王となる。

\*\*\*\*\*

「そして、現在の精霊王であり、貴女の父君でいらっしやいます」

ジルフィスはそこで一旦言葉を切り、片膝を付くと

「我等が精霊姫???リコーネ・フェイ・ルア・クロード様」

と続け、頭を垂れた。

「え・・・？」

## 戸惑い1

「・・・」

「姫様・・・リコ様？・・・大丈夫ですか？」

いろんな事を一気に聞かされ、その上更に思いも寄らない事まで言われた璃湖は暫し呆然としていたが、ジルフィスの気遣わしげなその声にハッと意識を戻した。

そして、大丈夫だと言うようにコクリと一つ頷く。

「リコーネ・フェイ・ルア・クロード。・・・それが私の本当の名前なんです」

ジルフィスは璃湖があまりにもあつさりと言った為に驚き、僅かに目を見開いたが直ぐに表情を戻し、「・・・ええ、そうです」と答えた。

「随分あつかりと理解されたようですが・・・」

「上手く言えないんですけど、どうしてかこれは自分の名前だっちはつきりとそう感じるんです」

「そう、ですか」

何処か安心したようにジルフィスはそう言つと、誰にも聞き取れない程に小さく良かったと呟いた。

しかし、璃湖の次の言葉に一変して表情を硬くさせた。

「あの、暫くの間一人にしてもらえませんか？」

「リコ様・・・？」

ジルフィスはその璃湖の突然の申し出に困惑し、窺うようにその名を呼んだ。

そして、ジルフィスの後ろで静かに控えていたミールとロダも心配するように璃湖を見ていた。

「一人でゆつくり考える時間が欲しいんです」

璃湖は何か言いたそうに口を開こうとするジルフィスを遮るように、更に言葉を重ねる。

「少しだけで良いんです。お願いします」

そしてゆつくりと頭を下げた。

それを見たジルフィスは、璃湖に気付かれないように小さく息を吐き、まずは頭を上げるように言った。

それでもなかなか頭を上げようとしない璃湖に、渋々と言ったように口を開く。

「・・・分かりました。その代わり、少しでも何か異変があれば直ぐに声を掛けて下さい。声が届く範囲に待機しておりますので」

そう言われて漸く璃湖は頭を上げ、彼等の方へ視線を戻した。

三人とも心配げな視線を璃湖に向けていた。

それを見た璃湖は、申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

「ごめんなさい・・・勝手なことを言って・・・」

それから璃湖は僅かに目を伏せ、顔を俯けた。

それに対しジルフィスは、すっと心に染み渡るようなそんな優しい

声で答えた。

「そんなに気になさらなくて大丈夫ですよ。リコ様は何も悪い事をした訳ではないのですから」

「・・・」

「こういう時は謝るのではなく、“ありがとうございます”とその一言だけで十分なんですよ」

その言葉に璃湖は若干戸惑いながらも、

「・・・ありがとうございます」

と返し、漸く少しだけ表情を和らげた。

その璃湖の表情を安心したように見ていたジルフィスは、「そういえば」と何かを思い出したように声を上げた。

「体調の方はどうですか？もう顔色は大分良いみたいですが」

「え？・・・あ、はい・・・だいじょうぶだと、思います」

突然の話題転換にまごつきながらも璃湖がそう答えると、ジルフィスは

「そうですか。それを聞いて安心致しました」

そう言いながら心底安堵したというように柔らかな笑みを浮かべ、

「ではミール、お願いしますね」とミールに呼び掛けた。

それに対してミールは、「はい」と一言返すと一歩前に出た。

そしてその瑠璃色の双眸で何かを探るように璃湖をじっと見据える  
と一つ頷き、それから右手を前に出すとスツと横に腕を引いた。

すると、

パチンッ

という破裂音が辺りに響いた。

それは、璃湖を包み込んでいた水膜が弾けて消えた音だった。

ボウファイエル

「え・・・？」

突然の事に璃湖は咄嗟に反応できず、一瞬ぼかんとした表情をしたが、次の瞬間にはこのままでは下にある泉に落ちてしまうだろう事に思い至り、さあっと蒼褪めた。

そして、その衝撃に耐えるようにギュッと硬く目を閉じた。

しかし予想に反して何の衝撃も来ることは無かった。

「・・・？」

璃湖が恐る恐る目を開けてみると、さっきと変わらず璃湖の身体は浮いていた。

それから璃湖が落ちなかった事に安堵の息を吐いたのを合図としたかのように、璃湖の身体はふわふわと泉の上を移動し、ゆっくりと地面に降り立った。

## 戸惑い2

「・・・あ、あの・・・今のはいつたい・・・？」

璃湖はたった今自分の身に起きた事が理解できず、半ば呆然としながらもジルフィスにそう尋ねた。

「もう体調の方は回復されたようなので、ミーレに念の為に再度貴女の体調確認と水膜ボウファイエルの解除をしてもらったんですよ」

それを聞いた璃湖はそうじゃない、と困惑した表情になった。

水膜が消えた後も私の身体が落ちずにいたことについて訊きたかったんだけど・・・

その璃湖の表情から彼女の考えを察したかのように、ジルフィスは「因みに」と次の言葉を続けた。

「水膜が消えた後の事は、リコ様、貴女御自身が為さった事であつて、私達は一切何もしておりません」

「え・・・？」

ジルフィスはよく分からないという表情をした璃湖を見ると、さつき言った事を補足するように言葉を付け足した。

「つまり、水膜が消えて尚リコ様が落ちずにいた事も、その後無事に地面に降り立つことができた事も、どちらもリコ様が御自分の力

で為さつたと言う事です」

「でも、私は特に何かした覚えはないですよ・・・？」

「恐らく、無意識に行つた事だったのでしよう。貴女は精霊姫なのですから、自然と力の使い方は身に付いておられるのかと。その為にそういった事が意識せずとも可能なのだと思います」

そんなこと言われても、自分が精霊姫だつて知つたのはついさっきだし。今もそんな自覚はないし全然ぴんと来ない。・・・あ、でも・・・

そこで璃湖は、一つだけもしかしたらと思ひ当たる事があつたのを思ひ出した。

ひよつとして、この世界で最初に目が覚めたときにいたあの大きな樹、あそこから飛び降りたときも今と同じだつたってこと？あのと  
きも私自身が力を使つていた・・・？

「どうやら何か思ひ当たる事があつたようですね。まあ、つまりは  
そういう事です」

と、そんな感じでジルフィスがざっくりと話を締め括つてしまつた  
為？？？？

・・・そういうことって・・・どういふこと？

????結局、璃湖はいまひとつ納得が出来ないままにこの話は終了となった。

「それでは、そろそろ私達は一旦この場から離れます。ですが先程も申し上げましたように、何かあれば遠慮なく呼び下さい。直ぐに駆け付けますので」

そしてジルフィスはミールとロダの二人を促すと、踵を返し歩き出した。

しかし、そのまま去って行くのかと思いきや、数歩歩いたところでジルフィスは突然ぴたりと足を止め、璃湖の方へと向き直った。

「・・・?」

璃湖がどうしたのかと不思議に思い、首を傾げてジルフィスを見ると。

「申し訳ありません。一つ大事な事を言い忘れていました。実は・・・」

そこでジルフィスはふと何かに気付いたように言葉を切り、僅かに璃湖から視線をずらした。

しかし直ぐに璃湖へと視線を戻し、

「残念ながら時間切れのようです。仕方ありませんね。まあ、あの方が直接話されるでしょうし、問題ないとは思いますが・・・リコ様、気を確かに持って頑張ってください」

そんな謎に満ちた言葉を残すと、軽く璃湖の方へ向けて礼をとってから踵を返し、先にいなくなっていた二人の後を追って今度こそジルフィスも去って行った。

結局何だったんだろう？・・・それに、あの方って？頑張るって何を？

それから少しの間、璃湖はそんな事を考えながら三人が去って行った方をぼんやりと見ていた。

\*\*\*\*\*

「二人とも、行きましょう」

「え？・・・あの・・・」

ジルフィスはミーレとロダの二人と合流するなりそう言うと、歩みを止めることなくそのまま“レーヤ・リプリアル光の草原”と呼ばれるこの不思議な空間の出口へとさっさと向かう。

ミーレはその事に戸惑い、慌ててジルフィスの後を追いかけるながら声を掛ける。

更に、そのミーレの後をロダが三人分くらいの間隔をあけながら静かに付いて行く。

「待ってください、ジルフィス。姫さまをお待ちするのではなかつ

たんですか？」

その言葉に漸くジルフィスは足を止め、後ろに付いて来ていた二人を振り返った。

そして困ったような笑みを小さく浮かべ、一つ息を吐いた。

「そうしたいのはやまやまなんですが、実はでん???」

「分かりましたそれ以上は言わなくて結構です」

ジルフィスの言わんとする事を鋭く察知し、ミレーは直ぐ様早口でそれを遮った。

それに対してジルフィスは苦笑を返した。

「相変わらず苦手なようですね」

「苦手というか、どう接していいか分からないんですよ。何を考え  
ているのか分からなくて」

「あの方の考えている事なんて、一つしかないでしょう」

「ええ、それはよく分かってますよ。分かってるんですけど・・・い  
え、やっぱり分かりません」

「どっちですか・・・まあ、気持ちは分からなくもないですが」

「はぁ・・・とにかく、そういう事なら姫さまには悪いですけど、  
私達には先に戻る以外に選択肢はないって事ですネ」

「そうですねえ。些か不本意なところはありますが、止むを得ない  
でしょう」

こうして彼等三人は、予定変更を余儀なくされ、璃湖を待つことな  
く先に地上へと戻っていった。

それにしても、リコ様は大丈夫でしょうか・・・

あの方のリコ様に向ける想いは生半可なものではない上に（寧ろ勢い余って鬱陶しいくらいですが）、大変甘ったるいものがありますし（それはもう思わず砂を吐いてしまいそうになるくらいに）。  
・・・果たしてリコ様は耐えられるでしょうか。

まあ、いくらなんでもいきなり最初からそんなあからさまな事はないでしょうから、大丈夫だとは思いますが・・・

そんなジルフィスの想いに反して、彼の心配した事が後に現実のものとなるまであと少し・・・

### 戸惑い3（前書き）

真に勝手ながら、小説タイトルを変更しました。  
旧「絶望の果てに……」↓新「精霊姫の逃亡劇」

### 戸惑い3

・・・ど、どうなってるの？・・・ええっと、まずは落ち着こう、うん。

落ち着け、落ち着くんた、私。

とりあえず、今の状況を確認することから始めよう・・・

えっと、私の名前は社璃湖、17歳のごく普通の女子高生（だった）。

本名はリコーネ・フェイ・ルア・クロードというらしい（長い・・・）。

異世界トリップしてしまったらしい（というよりこの場合は、戻って来たというべき？）。

そして、実は私は人間じゃなくて精霊で、おまけに精霊姫だとも言われた（ナニソレ、オイシイノ？）。

どうやら不思議な力も使えるらしい（別にそんなのいらないのに）。

でも、だからと言って何が変わったわけでもなく、姿形だって今までと何も変わらない？？？はずだった。

日本人としてはごく一般的な黒髪黒眼。髪の毛の長さは肩に軽く掛かる程度。

身長は残念なことに平均より少し低くて、153cm。

特に痩せているわけではないけど、太っているわけでもない、いたって普通の体型。

別に卑下するわけではないけど、顔だって特別可愛くもなければ、綺麗でもない、普通の顔だ。

なぜか肌の色だけは日本人らしくなく、異様に白くてむしろ蒼白い

と言っているほど。

でも普通に健康だし、それ以外は特に変わったところはない。

???間違はなくそうだったはずなのに、一体これはどういうこと  
なんでしょうか・・・?

ダレカ、オシエテクダサイ。

あれから、ジルフィス達がいなくなってから暫くして、ふと違和感  
をおぼえた璃湖は、まさかと思い目の前にある泉を覗き込んだ。

すると・・・

そこには見慣れた自分の姿???ではなく、見知らぬ少女が映って  
いた。

だれ!?

驚いた璃湖は思わず後ろを振り返ってみたが、そこには誰もいなか  
った。

それから、恐る恐るもう一度泉を見てみた。

案の定、そこには先程と同じく見知らぬ少女が映っていた。  
見知らぬ少女とは言っても、既に璃湖は気付いていた???この泉

に映る少女が誰であるかを。  
ただあまりにも変わりすぎていて、その現実を認めたくなかっただけ。

・・・私、だよ。どう見ても、どう考えても。

だってさあ、ありえないほどに変わってはいるけど、基本的な顔のつくりはそのままで見慣れたものだし。

それにさっきから視界の端に映る自分の髪の色と長さが、目の前に映る人物と同じなんだよね。

璃湖のごく普通だった黒髪黒眼は、普通とは懸け離れた色彩となっていた。

加えて、変わったのは色だけではない。

肩に軽く掛かる程度の長さだった髪は、腰にまで届くほどに伸びた綺麗に透き通る見事な銀髪になっていた。

そして、大きめの黒かった瞳は淡いすみれ色をしていた。

蒼白かった肌の色は血色の悪さが消え、その代わりに透明度の増した白い肌はどこか儚さを伴っていた。

その為か髪と瞳の色も相俟あいまって、彼女の全体的な印象をより一層儚いものに見せていた。

こうして、璃湖は冒頭の混乱状態に至った訳である。

それ故に、絶賛混乱中の璃湖は気付くべくもなかった???自分に

近づくと一つの影があったことを。

そして後に後悔することとなる。どうしてあの時もっと早くに気付かなかったのか、と。

まあ、例えどんなに早く気付いたところで逃げられるはずもなかったが。

そんなことなど全く知る由もない璃湖は、自分自身の変化に頭を悩ませていた。

本当、何でこんなことに・・・？

顔立ちは変わってないのに、髪と眼の色が全然違うからすごく違和感があるし。

それに、髪はすごく伸びてるのに、身長が全く伸びてないのがちょっと残念・・・

というより、こんなに変わってて髪まで伸びてるのに、何で今まで気付かなかったの、私。

もしかして私は、自分で思ってるよりこの状況に混乱してる？  
自分自身の変化にさえ、気付かなかったほどに？

それにしても、ジルフィスさん達教えてくれればいいのに。

あ、ひょっとして、最後にジルフィスさんが言っていた“言い忘れた大事なこと”って、このこと？

そんな璃湖の悶々とした思考を打ち消すように、何処か懐かしく感じる声が静かに響いた。

「違っよ」

その声に驚いた璃湖は、キヨロキヨロと辺りを見回した。

「ジルが言おうとしていたのは、僕のことだよ」

どこ？

「こつちだよ」

その声に後ろを振り返ってみると、驚くほど近い距離から紫紺の瞳がじつとこちらを見つめていた。

そして璃湖と目が合うと、その瞳がふっと優しく細められた。

「やっと会えた、可愛い可愛い僕のコーネ」

突然響いた声の主である青年は、ひたすらに甘い熱を秘めた瞳で、そうそつと璃湖に甘く囁いた。

対する璃湖は、その青年の言葉を聞いた途端に不思議な感覚が胸を占め、更に戸惑いを強くするばかりだった。

**幕間 精霊姫を巡る想い（前書き）**

場面がころころ変わります。

## 幕間 精霊姫を巡る想い

ミリア・オーク  
聖母の樹海が途切れるその境には、東西南北それぞれの方角に一つずつ、計四つのログハウスが建てられていた。

その内の一つ、西にある白い屋根を持つログハウスに、暗闇の中一人の男が佇んでいた。

その男の手には“手紙珠”<sup>レトシュール</sup>と呼ばれるものが握られていた。

男が思わずといったように溜息を吐き、手紙珠を机の上に置くと、まるでそれが合図となったかのように淡く光り出し、枯れ葉となり一瞬の後に空気に溶け込むように消えていった。

「まさか、あの子が・・・だが、それなら樹海の騒ついた空気にも納得がいく」

男はそう呟き、何かを考えるように暫く手紙珠が消えた場所をじっと見つめていた。

それから後、男は机の上に乱雑に置かれていた本の山と紙束を無造作に退かしスペースをつくると、チョークのようなものを手に取った。

「一応、あいつらにも伝えておくべきだろうな」

男はカツカツと音を響かせ、机の上の空いたスペースにスラスラと淀みなく複雑な紋様を描いていく。

それが描き終わり、最後の仕上げを、というところで家のドアが騒々しく開けられる音が響き渡った。

そして、バタバタと騒がしい足音が真っ直ぐに男のいる部屋へと向かい、そのままの勢いでバアアンツと大きくその扉が開け放たれた。

「大変ですわっ!!」

「・・・フリー、いつも言っているだろう。少しは力を加減しろと。うちのドアを壊す気か？」

「今はそれどころではありませんわ。それに、これでも十分加減はしてますわよ」

「ハァー・・・それはお前の基準で、だろ?・・・まったく、だからセルリングをつけると言ってるんだ」

「・・・そ、そんなこと今はどうでもいいんですわ。それよりも、やつと???」

「どうでも良くはないだろ。・・・まあ、今回は取り敢えず良いけどよ。大方お前がここに来たのは姫の事でだろうしな」

「??? ひい様が・・・って・・・え?・・・あなた、もう知っていましたの?」

「まあな。実はほんの数刻前までここに居たからな。」

「な・・・いたって、ここに? ひい様が?・・・」

「ああ、そうだ。いろいろと訊きたい事は有るだろうが、詳しい事は後。それより、他の奴等は?」

フリーは男のその有無を言わせない口調に、多少なりとも反発する気持ちを感じたが、今はそれどころではないと思い直す。

そして、「ぜったい、後で説明してもらいますわよ」と前置きしてから男の質問に答え始めた。

「??? 御二方とも既に知ってらっしゃいますわ。ただ、レフィレム卿は霊力が安定せず体調が思わしくないようで、自宅で待機しているそうですわ。何かあったら連絡陣で報告をと仰られていましたわ」

「・・・そうか。何だか長引いてるな。一度リーヴ殿に診てもらった方が良くかもしれないな」

「無理だと思えますわよ。寝てれば直るの一点張りですもの。??  
?それよりも、ですわ。ロフェール殿が一旦精霊宮に寄ってからこ  
ちらに向かうと仰っていましたの」

「・・・精霊宮に?それは・・・大丈夫、なのか?」

「・・・そんなこと私に訊かれても困りますわ」

「・・・・・・・・」

「これから忙しくなりそうだな。いろいろと・・・」

「・・・ですわね。でも、私はひい様にお会いできればそれだけで  
満足ですわ。ずっとその日を心待ちにしていたんですもの」

「・・・・・・・・」

そう言つて胸の前で両手を握り合わせ、うつとりとした目で虚空を  
ぼんやりと見つめる彼女に、男は若干呆れたような視線を向けてい  
た。

\*\*\*\*\*

一方その頃、とある場所にて、とある会話がなされていた。

「陛下、お願いですからいい加減に宮にお戻り下さい」

「何故・・・?」

「何故、ではありません。先程から何度も申し上げていますでしょ  
う。陛下がいつまで経つてもお戻りにならないので、政務が滞っ  
ている上に決裁待ちの書類も山のように溜まっているんですよ」

「へえ、それは大変だな」

「何を人事のように・・・本当にお願いしますから、仕事をして下

さい」

「そう言われてもなあ。あの子に会えるまでは何も手に付かないんだから仕方ないだろ」

「開き直ったように言うのは止めて下さい。・・・まったく、貴方様という人は。???セレミアーナ様、貴女様からも陛下に何とか仰って下さい」

「そおねえ、仕事は大切よねえ・・・でもお、わたくしも早くあの子に会いたいわあ。リドくんばかりずるいものお」

「な!・・・セレミアーナ様までそのような事を仰られては困ります」

「・・・・」

「ッ・・・分かりました。分かりましたよ。姫様にお会い出来れば、ちゃんと仕事をして頂けるんですね?」

二人の無言で訴えかけてくるその強すぎる眼差しに、彼は堪えられなくなり遂に渋々ながらも降参した。

「ああ、約束しよう」

「ああもう・・・本当に必ずですからね。???シーフ殿、全て聞いていましたね」

「確かに聞いてたけどよ・・・」

「では、くれぐれも頼みますよ。大至急でお願いします」

「・・・ハアー、りょーかい。???ああそうだ、陛下。一応言つとく。あの殿下を相手にするんだからな、そう長い時間は稼げないぞ」

「ああ、それで構わない」

シーフはその言葉を聞くと、その場に居る三人に背を向け、風を纏い姿を消した。

\*\*\*\*\*

更にところ変わって同時刻、精霊宮にて。

「ただいま戻りました。つきましては陛下に御報告がありますので、御目通り願いたいのですが」

「え、ええつと・・・それが、実は・・・」

「???陛下なら、ここにはいらっしやらないようですよ、ノルテア殿」

「ロフェール殿、何故ここに貴方が？それに、陛下がいらっしやらないとは一体・・・？」

「ここには少しばかり確認したい事があったもので。陛下については、私も詳しい事は何も。まあ、大方いつものようにまた息抜きがしたくなったとか、そんなところだとは思いますが」

「そうですか。それは、困りましたね」

「ところで、ノルテア殿。それから、そちらの御二方にも。一つお訊きしたい事が」

「?・・・何でしょうか？」

「姫様・・・精霊姫様がお戻りになられ、つい今し方まで貴方方と一緒にだったというのは事実でしょうか？」

その言葉を聞き、ジルフィス、ミール、ロダの三人は思わず息を呑んだ。

不思議な感覚、それは・・・

はあ・・・は・・・あ・・・はっ・・・

なんで？どうして？・・・まあ、やだあ。どうしたらいいかわかんないよあ・・・

・・・ここ、どこなのお！？

さっきからずっと走ってるのに、ぜんぜん景色変わんないし・・・

何だか同じところをぐるぐる回ってるだけな気がするし・・・一体どうなってるの？

どうしよう・・・このままじゃ、追いつかれちゃうよあ・・・

\*\*\*\*\*

遡ること半刻ほど前。

『やっと会えた、可愛い可愛い僕のコーネ』

璃湖は戸惑っていた。何をどうしたら良いのかも分からなかった。そして、青年の熱を孕んだ甘い眼差しに射竦められ、囚われ、身動き一つ出来なかった。

何故かその瞳から眼を逸らす事が出来ず、ただ呆然と目の前の青年を見つめるしかなかった。

璃湖に優しく甘い眼差しを向けるその青年は、何だか光り輝いて見えた。

決して比喻などではなく、本当に璃湖にはそう見えていた。思わずその眩しさに眼を細めてしまう程に。

さらりと流れる髪は、蜂蜜を溶かし込んだような不思議な色合いの銀髪。深みのある紫紺の瞳は、まるで宝石をそのまま嵌め込んだかのように。男性にしては細身な体格に、身長は170cm代の半ば程だろうか。形の良い薄い唇はゆるく微笑みの形に弧を描いている。服装は何処か身軽さを感じさせるものだった。生成りのシャツにゆったりとしたズボン。腰の辺りを締める帯は、身体の脇に少し長めに垂らされていた。そして、長めの羽織は袖を通さずに肩からふわりと軽く引っ掛けるように身に纏っていた。それから、歩き易そうなサンダルを履き、片方の足首には金褐色のリングが幾つか付けられていた。

どれくらいそうしていただろうか。図らずも見つめ合う形となっていたことに、璃湖は漸く気付きハツとなった。

それに対して青年はにつこりと笑みを深め、璃湖の長くなってしまった銀色の髪に軽く触れると、

「僕のこと分かる？コーネ」

と訊いてきた。

璃湖は青年のその行動にビックリとし、僅かに身を引きながらも、彼の言葉にぼんやりと頭に浮かんだ名前をそのまま確かめるように口にする。

「・・・るう・・・？」

最初青年は璃湖に身を引かれ、微かに悲しげに表情を曇らせたが、彼女が口にしたそれを聞くと嬉しそうに、何処かほっとしたように相好を崩した。

「よかった。ちゃんと覚えていてくれたんだね」

その言葉を聞いた璃湖は、途端にさっきの不思議な感覚が蘇<sup>よみがえ</sup>り、何故だか急に逃げなくてはという焦りにも似た感情に支配された。その感情に璃湖は訳が分からず、どうしたら良いのかも分からず、どつと押し寄せるそれに耐え切れなくなり、遂には????

????逃げ出した。脱兎の如く。感情の赴くままに。

じりじりと数歩後退り、意を決して勢い良く踵を返すと、あとはもう振り返らずに一気に走り出す。

それはもう、物の見事なスピードで。これ以上はないというくらいの速さで。

まるで、何かに追いついて立っているかのように。

\*\*\*\*\*

こうして璃湖は、ただひたすら闇雲に走り続ける現在の状況に至っている。

走って。走って。走って。走り続けて。  
けれど、遂に限界が訪れた。

元々そんなに体力がなかった璃湖は、逃げなきやという焦る気持ちとは裏腹に、もう一歩だって動けそうになかった。

仕方なく璃湖は、近くの木に背を預けると、ずるずるとその場に座り込んだ。

そして、疲れた頭でぼんやりと考える。

るう・・・ルウ・・・ルネ・・・

さっきはぼんやりとしていたそれは、今でははつきりと頭に浮かぶ。

リドルネ・フェイ・ルウリ・クロード。

それがあの人の名前。

そして、さっきからずっとこの胸の内を満たす不思議な感覚。  
今なら何となく分かる。それは懐かしさ。

欠けていたものが埋められたような。

足りなかったパズルのピースがぱちりと音を立てて嵌ったような。  
そんな感覚。

ギョツと胸が締め付けられるような、どこか切なさを伴った懐かしさ。

そんな事をつらつらと考えていた璃湖は、ふと気付く。

「はぁ・・・着替えたい。お風呂に入りたい。」

璃湖には正確なところは分からないが、恐らく二日は今の服を着続けているだろうと思われた。

彼女の現在の恰好は、この世界に来る前が学校帰りだった為、制服姿だった。

長袖のブラウスに赤いリボンタイ。胸元に校章の入ったベージュのカーディガン。臍脂色を基調としたチェック柄の膝丈スカート。紺の靴下にこげ茶色のローファー。

それらが今では何処か埃っぽく汚れていた。  
更に散々走ったせいで、ブラウスが汗でじっとりと肌に張り付いて気持ち悪かった。

「はぁ・・・もうやだ」

そうポツリと言葉が零れた時、突然シャランと澄んだ音が響いた。

そうして気付けば、目の前にあの青年？？？リドルネが立っていた。

「もう鬼ごっこはおしまい？」

そう言つてリドルネはにこりと微笑み、璃湖の前に何処が見覚えのある鞆を置いた。

「その中に着替えが入ってるから」

「・・・ど・・・して・・・？」

「ん？ああ、ミールが用意しておいてくれたみたいだよ」

「ちがつ・・・そうじゃなくて」

「うん、分かつてるよ。ちゃんと全部説明するから。でもその前に、ここじゃあなんだから。ちよつと場所を変えよう？」

リドルネがそう言つて璃湖に手を差し出そうとした瞬間????

「おっと、そこまでだ。????何とかぎりぎり間に合つたな」

?????という何処か飄々とした男の声が、リドルネの行動を遮るように響き渡った。

奇立ち（前書き）

リドルネ視点です。

## 苛立ち

『おっと、そこまでだ。？？？何とかぎりぎり間に合ったな』

その声が聞こえた途端、一瞬にして顔から表情が消え去ってしまうのが自分でも分かった。

そして、目の前の状況を理解すれば、凍えるような冷気にも似た黒い感情が溢れ出てしまったことも・・・まあ、仕方ないと思うんだよねえ。

ああ、でもやっぱり駄目だね。このままだと僕の大事なコーネが怯えてしまうし・・・

何処か蒼褪めたように見えるコーネを見遣りながら、そんな風に思ったりもするけれど。

うん、やっぱり無理かな。どうにもこの黒く冷たい感情は抑えられそうにもないよ、困ったことにね。

頭では駄目だと分かっているんだけど、心の方は別というか・・・

この胸の内に渦巻くどす黒いものは、今にも暴れ出しそうで。

そして厄介なことに、目の前の状況が更にリドルネの心を揺さ振り、これでもかという程にその黒い感情を煽り立てる。

先程までの手を伸ばせば触れることの出来る距離とは違い、大分遠くへと離れてしまった璃湖。

加えて、今も尚現在進行形でリドルネから離れつつあるこの状況。

だが、そんな状況の中にあっても何故だかリドルネにはどうするとも出来なかった。

そのことが今最も彼を苛立たせる原因となっていた。

はぁ・・・全くこれは一体どういうことなんだろうねえ？

やっとコーネに逢うことが出来たっていうのに。

・・・さて、ホントにどうしてくれようか。

こんなに僕を怒らせて、もちろん覚悟は出来てるんだよねえ???  
親愛なる父上様？

こんな事が出来るのも、やろうとするのも考えるまでもなく父上だけだ。

本当に、あの人は性懲りもなくこんな大人気ない事を。

一度ならず二度までも僕の邪魔をするなんて??? 選りにも選ってコーネのことで。

それがどんな事態を引き起こすか、父上ともあろう人が分からない訳がないだろうに。

今ではもうすっかり見えなくなってしまった璃湖。

そのことにより、リドルネは更に静かに冷たい怒りを募らせるばかりとなった。

「それで？君は一体どう責任を取ってくれるつもりなの??? 口シュベルト」

につこり、と何処か昏い笑みを浮かべながら、リドルネはこの笑え

ない状況の直接の原因となった男に優しく問い掛けた。

\*\*\*\*\*

コーネがこの世界に戻って来たことは、その瞬間に直ぐ気付いた。僕はその瞬間のことをきっと一生忘れない。いや、忘れられない。

心の底から湧き上がる喜びが一気に僕を満たし、全身が歓喜に打ち震え、ざわりと鳥肌が立つ。

それからまるで、僕を取り巻く周囲の環境、世界全体が一変したような不思議な感覚に囚われる。

例えて言うならばそれは、モノクロだった世界が一瞬にして鮮やかな色彩溢れる空間へと切り替わったかのように。

戸惑った。どうしたら良いのか分からなかった。

こんなにも強い感情は久しぶりで、本当に酷く戸惑った。

でも、最終的に僕の心を占めていたのはある一つの想いだけだった。ただ逢いたい???その想いだけが。

逢いたくて。逢いたくて。逢いたくて。

次から次へと溢れてくるその想いは尽きる事がなく、むしろ勢いを増し、次第に熱い雫となって止め処なく僕の頬を濡らした。

それはもう、端から見たらとんでもなくみっともない光景だったと思う。

でも、その時の僕には少しも気にならなかった（まあ、誰も近くに

は居なかったけど)。

それから僕は、コーネに逢いたいと心が求めるままに行動を開始した。

あの子の居場所は探すまでもなく分かっていた。

自然と身体がその場所に向かうままに任せて空間を飛んで行く。

そして、もう少しでコーネの居る場所に着くというところまで来た時????

????邪魔が入った。父上の命を受けた者達によって。

「・・・父上、一体どういうおつもりですか？」

「ん？何の事だ？」

「お分かりでしょうに、素っ惚けるのは止めて下さい」

「だってなあ、お前ばかりあの子に逢うのはずるいだろっ？」

「・・・父上・・・まさか、それだけの事で・・・？」

「他に何がある？」

その言葉に、ひやりと冷たい空気がその場に漂い始める。

「・・・父上、いい加減にしてよね。そんな風に思うなら父上も逢いに行けばいいでしょ」

「ん？どうした、リド。口調が崩れてるぞ」

場の空気をちつとも読もうとしない、むしろ読む気なんかさらさらない、父上と呼ばれた男????精霊族の王であるその男は飄々とそ

うのたまった。

「・・・陛下？」

につこり、と。男に絶対零度の笑みが向けられる。

今や永久凍土の如くその場は冷え切っていた。

「仕方ないだろう？執務が溜まっていて、私はまだあの子に逢いに行けない」

「自業自得ですね。・・・はあ、母上から何とか仰って下さい」

それまで黙つてのほほんと二人のやり取りを見ていた女性？？？精霊族の王妃である彼女は、やはりのほほんとした口調で話し出す。

「リドくん、抜け駆けはしちゃだめよお？あの子に逢いたいのほみんな同じなんだからあ。ね？」

その時、リドルネは悟った。ここに自分の味方は居ない、と。

男は空気を敢えて読まないのに対し、王妃であるその女性は、空気は読むがその事を全く気にしないのである。

そんなやり取りを暫く繰り返した為に大分時間を無駄にしたが、それでも何とかその場を抜け出すことに成功し、璃湖の元へと向かった。

そうして、漸くリドルネは彼女を見つけることが出来た。

\*\*\*\*\*

それなのにまた邪魔が入った。

だから、この胸に渦巻く黒い感情は至極当然なものだと思うんだよねえ。

だというのに……

目の前に佇む男??? ロシュベルト・シーフは全く感情の読めない飄々と、いや、へらへらとした表情で、

「責任って、何の事だ？」

と、先程のリドルネの問いに対して同じように問いで返してきた。

ああもう、ホントにどうしてくれようか、と。

再度そう思いながらずっと表情を消し、眼を細めてひたとロシュベルトを見据える。

風に運ばれて（前書き）

すみません。大分遅くなってしまいました。

璃湖視点に戻ります。

## 風に運ばれて

辺りはまだまだ夜の気配が色濃く、木々の合間からは月明かりが差し込んでいた。

璃湖はその顔に疲れを滲<sup>にじ</sup>ませながらも、目の前の状況に、そして何もこととしたその不思議な生き物に、僅かに口元を綻ばせる。そしてその生き物に手を伸ばしかけた時、

「あ、ひめさまみーっけ！」

という声がしたかと思えば、次の瞬間には勢いよく小さな何かに背中から抱きつかれていた。

「ひゃっ！・・・な、何？」

突然のことに驚き後ろを振り向くと、座っている璃湖よりも少し高い位置にあるキラキラと輝く金色の目と視線が合った。

だ、誰・・・この子・・・？

\*\*\*\*\*

少しだけ時間は遡る。

あの時、璃湖に向かって伸ばされかけたりドルネの手を遮るように、何処からともなく声が響き、その一瞬の後に優しく柔らかな風が吹き渡った。

そしてその風がふわりと璃湖を包み込んだかと思うと、そのままりドルネから遠ざかるようにゆっくりと移動し始めた。

それらの出来事に何が何だか分からず呆然とし、気付けば大きな樹の前に立っていた。

その樹は、世界樹だとジルフィスに説明されたあの巨木??? 璃湖が最初に目覚めた時にいた巨木??? より幾分か小さくはあったが、それでも随分と立派な樹だった。

そしてその樹には、小さな子供くらいならすっぽり入ってしまえそうな大きさの洞が<sup>うろ</sup>あった。

いろいろと目まぐるしく変わる状況に何だか疲れてしまった璃湖は、その場に座り込み、ぼんやりと目の前の樹を見上げていた。

はあ。何だかすつごおおく、疲れたあ。もお、次から次へといろんなことがありすぎだよ。

それに、一体どれくらい時間が経ったんだろう? いろんなことがありすぎたせいか、随分と時間が経ったような気がするけど。

でも、ジルフィスさんたちと会ったときは夜で、今もずっと変わらず夜だから、もしかして思ってるよりもそんなに経ってない...? ...うう。もうやだ。何でこんな面倒くさいことになってるの? ここに??? この世界に来てやっとなんか終わりにできると思っ

たのに。

ああ、でも、もしかしたら今ならそんな状況から逃げられるのかも  
しれない……。のかな？

パタパタッ

と、突然に鳥が羽ばたいたような音が聞こえ、何だろうと思う暇も  
なく、頭の上にちょこんと何かが乗っかってきた。

その事に驚いた璃湖が思わず思いつ切り頭を振れば、その何かは一  
旦彼女の頭の上から離れ、今度は肩に乗ってきた。  
そこで漸く璃湖は、それが何であるかが分かった。

「……とり……小鳥？」

その言葉を合図としたように、一体今まで何処に隠れていたのか、  
小鳥を始めリスやウサギといった小さな動物たちが一斉に、璃湖の  
方へと集まってきた。

そして、気付けば一瞬にして璃湖は動物まみれになっていた。

訳が分からないながらも、ゆっくりとその動物たちを見渡してみる  
と、あることに気付いた。

ほとんどが馴染みのある動物だったけれど、その内の何匹かは全く  
見たことのない動物だったのだ。

丸っこいその身体はもこもこの毛に覆われていて、猫のような耳に  
狐のようなふっさりとした尻尾のある小動物系の動物だ。

毛の色は淡いピンクだったり、クリーム色だったり、真っ白かった  
り、茶色っぱかったりといったように様々で、中には真っ黒いもの  
もいた。

小さなその瞳は円らでくりくりとしていて、その存在を可愛らしく見せている。  
もこもことした毛も、思わず触りたくなるほど触り心地が良さそう  
だ。

そして、そつとその動物に璃湖が手を伸ばしかけた時、聞こえたの  
だ????あの声が。

そういう訳で、話は冒頭へと戻る。

\*\*\*\*\*

突然声を掛けてきたのは、小さな子供だった。

年の頃は5、6歳程だろうか。身長は大体110cmくらい。

蜂蜜色に透き通る髪は柔らかそうな猫っ毛で、それがふわふわと時  
折吹く風に揺れている。そして、木々の隙間から零れる月明かりを  
受けて、キラキラと輝く金色の瞳は少し垂れ目気味だ。

顔は子どもらしく丸みを帯びた輪郭で、左頬から鎖骨の辺りにかけ  
ては複雑な紋様に彩られていた。

その紋様が、その子供に不思議な存在感を与えていた。

そして不思議なのはそればかりではなく、その子どもの服装も見慣  
れないもので、璃湖の目を引いた。

淡い黄色のそれは無地の法被はっぴのような服で、その下には何も着てお

らず、さらしが巻かれているだけだった。  
それから何よりも璃湖の目を引いたのが、目にも鮮やかなオレンジ色の?????

かぼちゃ・ぱんつ・・・?あれって、そうだよな。かぼちゃパンツだよな、どこからどう見ても。  
何ではっぴ(?)にかぼちゃパンツ?

まあ、何だか妙にその恰好はこの子に似合ってるけど。

そんな風に、知らず知らず無言のままじっと目の前の子供に見入っている。

キラキラ、キラキラ、キラキラと。そんな突き刺さるような視線を感じて。

気付けば物凄くキラキラしいにつこり笑顔で、月明かりとは別の好奇心に満ち満ちた輝きのある金色の瞳にじーっと見つめられていた。

璃湖は妙な迫力のあるその視線に、思わずビクツと肩を揺らした。  
璃湖の若干怯えたようなその様子に気付き、その子供は好奇心に満ちたそれを引っ込めると、表情を柔らかなものへと変えた。

「ねえ、ひめさまは何でこんなところに一人でいるの?」

「え・・・?」

「あ、ごめんなさい、ひめさま。まずは、自己紹介からだよね」

「え・・・えつと?」

戸惑う璃湖にその子供は構わず続ける。

「ボクはトウウリ・シャルア。光の精霊だよ。」

「とうーり？」

「うーん、ちよつと発音違うけど。まあ、いいか。???これからよろしくね、ひめさま」

「う、うん。よろしく?・・・???あ、あれ？」

「ひめさま？」

「・・・えつと、その。・・・男の子？」

「・・・え？」

その子供???トウウリは最初、何を言われたのか分からないというようにきょとんとして璃湖を見ていたが、数秒の後には理解したのか、何処か慚然とした表情になった。  
そして、暫しの沈黙。

・・・。。。。。

少しばかり空気が重くなったように感じる中、無言で見つめ合う二人。

・・・えつと、どうしよう。私、何かまずいこと言っちゃった？

璃湖は何だか怖くて、目を逸らしたくても逸らせなかった。  
視線が、というよりもこの妙な空気が。

そんな璃湖を見て、トウウリはふつと表情を緩め、苦笑する。  
すると、さっきまでの何とも言えない微妙な空気が和らぐ。

「・・・もしかして、というよりもかしなくてもひめさま、ボク

のこと女の子だと思ってたでしょ？」

「う、うん」

「一応言っとくけど、こう見えてもボクはれっきとした男だからね」

「ご、ごめんなさい」

「まあいいけど。仕方ないよね、こんな見た目じゃ؟؟？それに、この姿になってから間違われたのは、一度や二度じゃないし・・・」

「？」

最後の方のぼやくような呟きは小さすぎて、璃湖には聞き取れずに首を傾げた。

「何でもないよ、ひめさま。それよりも???ねえ、キミたち。一体いつまでそうやってひめさまにくっついてるつもり？」

「え？」

突然のその言葉に驚き、トゥウリの視線を辿ると。

あっ！すっかり忘れてた。この子たちのこと。

???その視線の先には、璃湖にくっつく動物たちがいた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1012r/>

---

精霊姫の逃亡劇

2011年6月19日23時38分発行